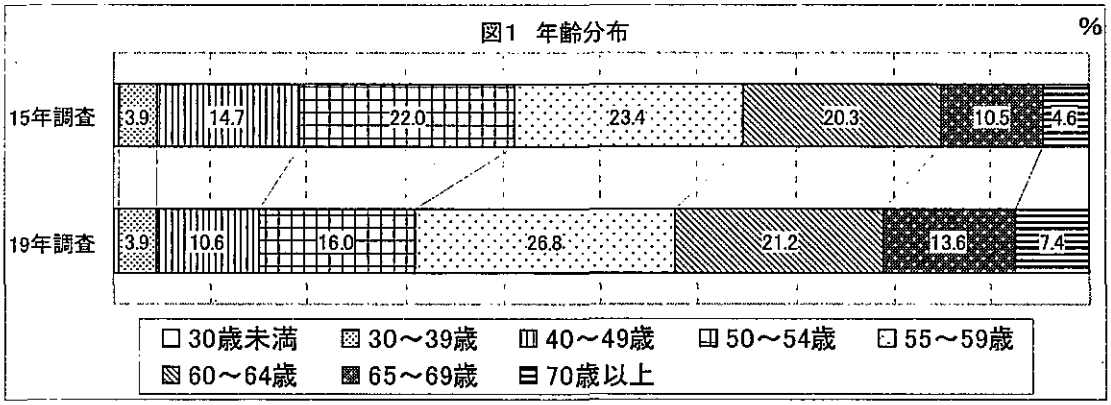
2．野宿経験タイプから見たホームレスの変容

2－1　ホームレスの高齢化と長期化　－前回（平成15年）調査との比較－

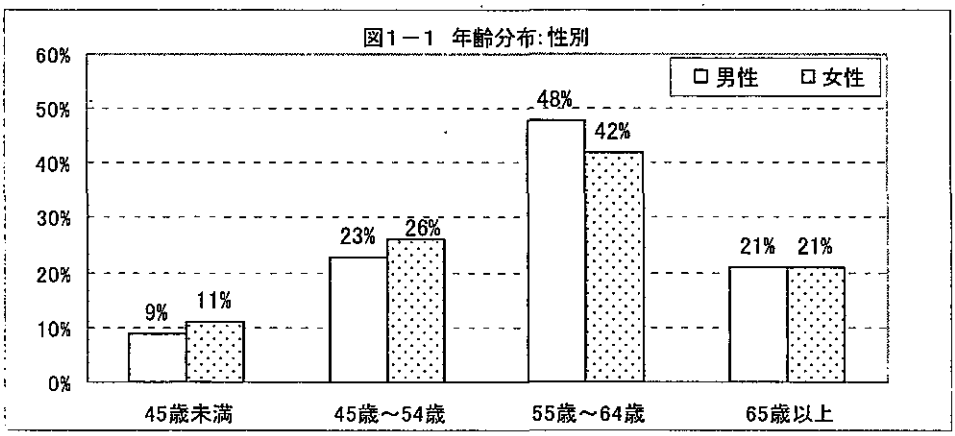
まず単純集計結果を利用して、前回（平成15年）調査結果との比較で、今回の調査対象の特徴を確認すると、前回調査に比べ、ホームレスの属性は２つの点で変化している。１つは、55歳以上のホームレスの割合の増加であり、もう１つは今回の野宿期間が５年以上の長期ホームレスの割合の増加である。

【高齢化】

年齢構成を前回調査と今回調査で比較すると、平均年齢は57.5歳（男性57.5歳、女性56.6歳）で前回より僅か1.6歳の上昇であるが、年齢分布を見ると40～49歳、50～54歳が減っており、55歳以上（55～59歳、60～64歳、65～69歳、70歳～）が増えている（図１）。

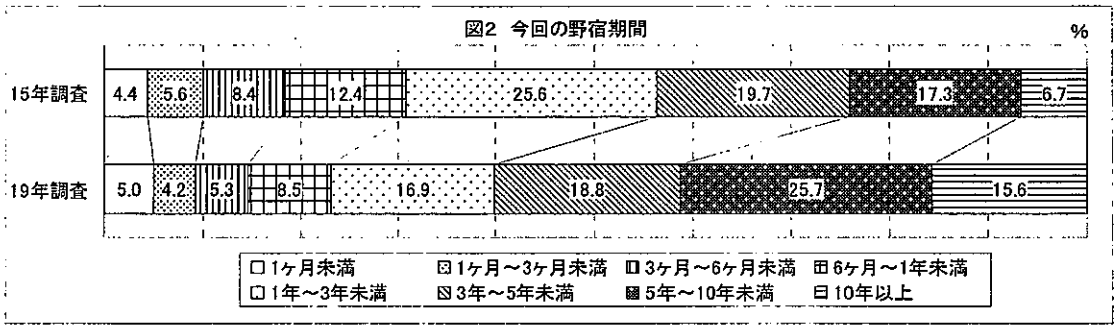


なお、今回調査で把握された女性は73名（3.6%）であり、前回調査の4.7%と比べると若干の減少である。今回調査結果のみを男女別で見ると、女性も男性も年齢構成はほぼ同じである。（図１－１）。

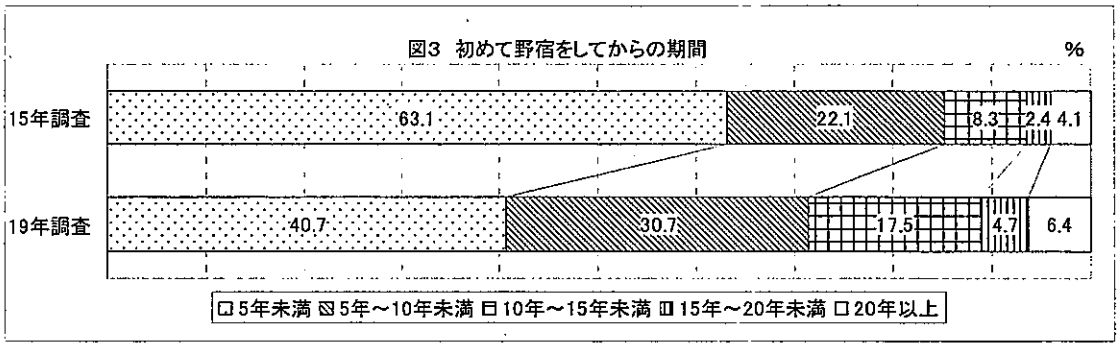


【長期化】

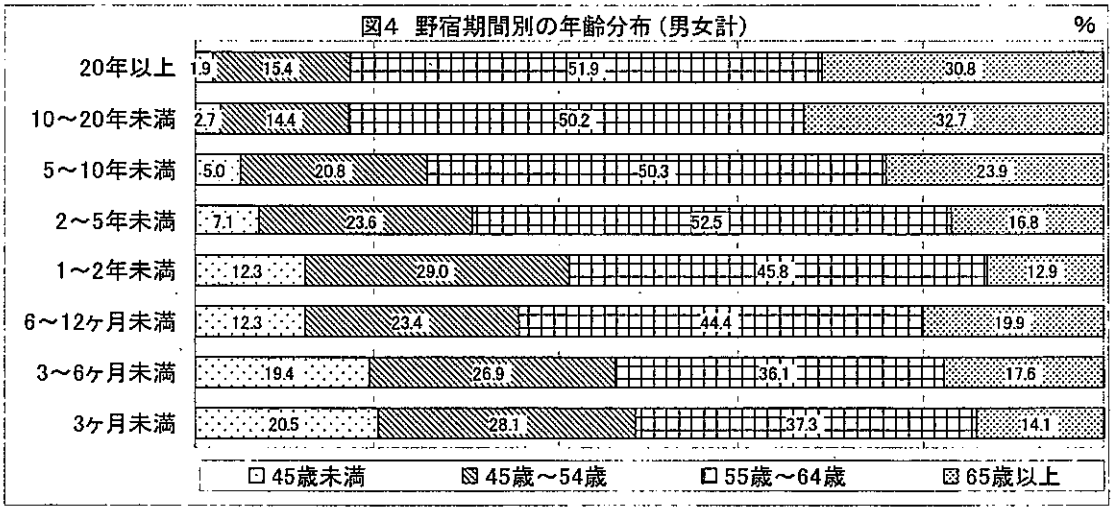
また、野宿期間の長期化の傾向も著しい。前回調査に比べ、今回調査では５年以上の長期にわたって野宿をしている者の割合が高く、「５～10 年未満」が 8.4 ポイント、「10 年以上」も 8.9 ポイント増加している（図２）。逆に３年未満が 56.4%から 39.9%へ大きく減少し、特に「１～３年未満」は 8.7 ポイント減少している。前回調査は 90 年代半ば以降のホームレスの拡大期を示しており、今回調査は、その拡大したホームレスが路上から脱却するグループと長期残留グループに分岐している時点と捉えることもできるかもしれない。



初めての野宿からの期間においても、「５年未満」が 63.1%から 40.7%へ大幅に減少し（22.4 ポイント）、逆に、「５年～10 年未満」が 8.6 ポイント、「10 年～15 年未満」が 9.2 ポイントとそれぞれ増加しているほか、「15 年～20 年未満」、「20 年以上」という長期の野宿経験者も増加している（図３）。



無論、ホームレスの年齢と野宿期間には関連があり、図４のとおり野宿期間の長期化が高齢化と結びついていることがわかる。



2－2　野宿経験タイプから見たホームレスの分布

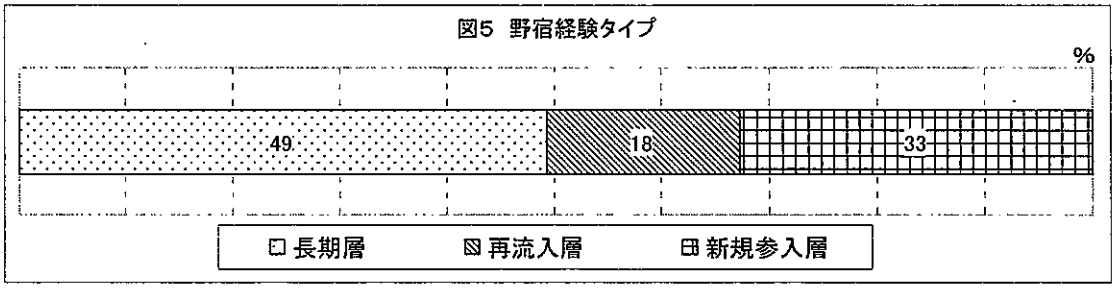
既述のホームレスの高齢化、野宿期間の長期化の傾向を前提にしつつ、これをもう少し詳しく検討するために、「分析の視点」（Ｐ２）で述べたホームレスの野宿経験タイプを使った分析を行ってみたい。すなわち、①長期層（今回の野宿が４年以上）②再流入層（今回の野宿が４年未満で、初めての野宿が４年以上前）③新規参入層（今回の野宿が４年未満で、初めての野宿も４年未満）の３つの区分である。

【野宿経験タイプの分布】

３つのタイプのそれぞれの分布割合は、表１、図５のとおりである。長期層は全体の約半数（49%）を占め、３つのタイプの中では一番多い。高齢化・長期化を深めている今回調査対象の約半数は、前回調査時点でも既に野宿生活をしていたことになる。一方で、新規参入層は全体の 33%を占めており、概数調査では前回調査よりホームレス数は減少していることが確認されているが、そのことは新規参入がなくなったことを意味していない。また、女性のサンプル数が少ないため留意が必要であるが、女性では、新規参入層が 53%と過半数を占めており、男性と比べ長期層、再流入層の割合低くなっている。

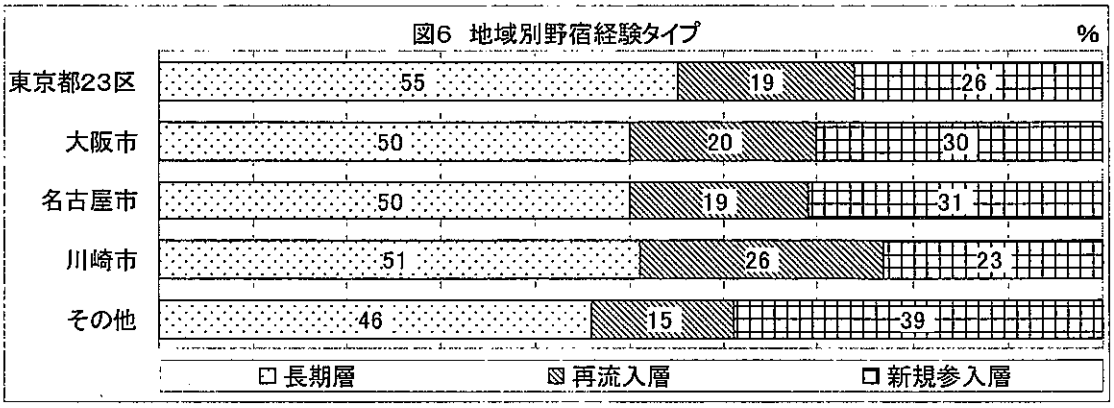
なお、再流入層は全体の 18%である。この層は一般生活への脱却が短期間しか継続しなかったタイプと考えられる。

表1　野宿経験タイプ	男性		女性		計(含む性別不詳)	
	n	%	n	%	n	%
①　長期層	955	50%	26	36%	988	49%
②　再流入層	350	18%	8	11%	362	18%
③　新規参入層	610	32%	38	53%	656	33%
計	1915	100%	72	100%	2006	100%
欠損	39		1		41	
合計	1954		73		2047	



【地域別の野宿経験タイプの分布】

この野宿経験タイプを地域別に見たのが図６である（男性のみ）。ホームレスが特に集中していた地域で長期層の割合が高くなっている反面、「その他」の地域で新規参入層の割合が高いことに気がつく。例えば、東京都２３区は長期層が 55%と最も高く、新規参入層は26%である。これに対して、「その他」は長期層が 46%、新規参入層は 39%と、新規参入層の割合がやや高い構成となっている。また、川崎市では再流入層の割合が他の地域と比べて高く 26%である。



【「今回の野宿」の形態と野宿経験タイプの関係】

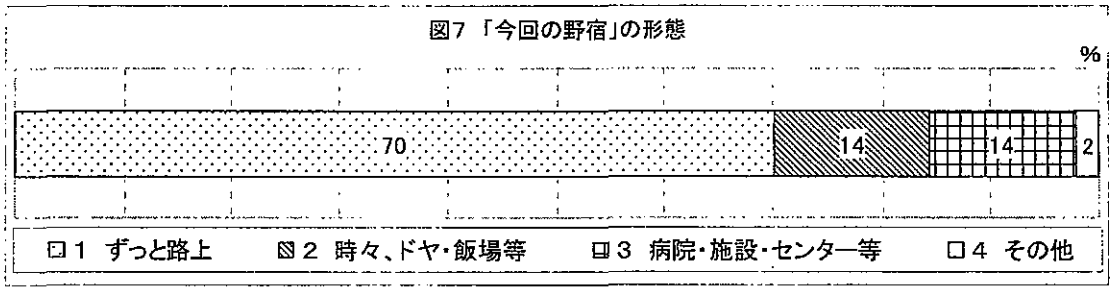
なお、今回の野宿の間においても、ずっと路上にいる者ばかりではなく、野宿している間に時々屋根のある場所に泊まった経験をもっている者も存在することが確認された。この状況を、

１．ずっと路上（野宿）生活をしていた
２．時々、ドヤ・飯場・ホテル等にも泊まったことがある
３．病院・施設・自立支援センター・シェルターに入っていたことがある
４．その他

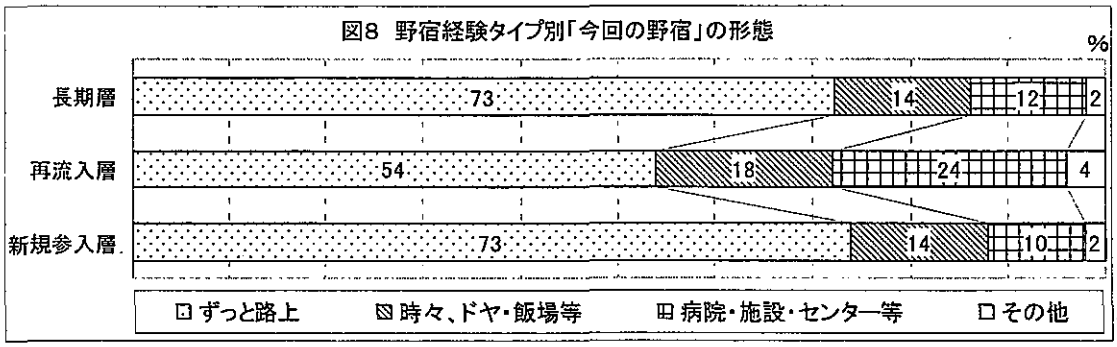
に区分し、これを『「今回の野宿」の形態』と名付けると、「ずっと路上」が約７割を占め、残り３割を「時々、ドヤ・飯場等」と「病院・施設・センター等」でほぼ均等に分けている（表２、図７）。

なお、女性では「ずっと路上」の割合は、男性の 69%に対し 86%と高く、それ以外の形態（「時々、ドヤ・飯場等」、「病院・施設・センター等」、「その他」）は例外と言っていいほど少ない。また、女性では再流入層の割合が低いことからも、新規参入層の多くが「ずっと路上」にいる形をとっていることがわかる。

表2「今回の野宿」の形態	男性		女性		計(含む性別不詳)	
	n	%	n	%	n	%
ずっと路上	1344	69%	62	86%	1420	70%
時々、ドヤ・飯場等	281	15%	4	6%	287	14%
病院・施設・センター等	269	14%	4	6%	275	14%
その他	41	2%	2	3%	43	2%
計	1935	100%	72	100%	2025	100%
欠損	19		1		22	
合計	1954		73		2047	



野宿経験タイプの「再流入層」は、単に４年前を基点にして、屋根のある場所から路上に再び戻った層を示しているが、「今回の野宿」の形態の「時々、ドヤ・飯場等」と「病院・施設・センター等」は、この４年の間に短期的に路上と屋根のある場所を行き来する層を表していると考えられる。なお、「時々、ドヤ・飯場等」は労働と結びついた宿舎やホテルその他の場所との行き来であるが、「病院・施設・センター等」は病院や福祉施設等制度が介在した場所との行き来である。これと野宿経験タイプの関係を見ると、図８のようになる（以降、図表は全て男性サンプルのみ)。



長期層では、約７割が今回の野宿生活の間「ずっと路上」と答えている。つまり、全体の半数を占めていた長期層の約７割が、４年前から路上に固定し、そのままずっと野宿生活を継続していることになり、残りの約３割は、４年前から長く野宿をしているが、「時々、ドヤ・飯場等」、「病院・施設・センター等」も利用していることになる。また、新規参入

層についても約７割が今回の野宿生活の間「ずっと路上」と答えており、残りの約３割は、「時々、ドヤ・飯場等」や「病院・施設・センター等」と答えている。

一方、再流入層では、今回の野宿生活の間「ずっと路上」と答えた者の割合は 54%であり、長期層、新規参入層と比較して、その割合が低いのが大きな特徴である。つまり、再流入層の約４割は、単にこの４年の間に再び路上に戻ったというだけではなく、再流入した後も、路上と屋根のある場所を行き来している者であり、換言すると、これらの者は、路上と屋根のある場所との行き来が定着してしまっている層と言うことが出来る。また、「時々、ドヤ・飯場等」と「病院・施設・センター等」の割合を比較すると、長期層と新規参入層では「時々、ドヤ・飯場等」の割合がやや高かったのに対して、再流入層では「病院・施設・センター等」の割合がやや高い（自立支援センター、シェルター利用で 11%、他の福祉施設を加えると 18%）ことが特筆される（巻末クロス表参照）。これは、再流入層では、路上と屋根のある場所を行き来している先の一つとして、ホームレス対策を含めた福祉施設が一定の位置を占めているからと考えられる。

【野宿経験タイプの前回との比較】（参考）

なお、前回調査と今回調査の野宿経験タイプを比較したものが表３である。前回調査では、野宿期間をカテゴリー値で聞いており、４年で区切ることができなかったため、両者とも５年で区切っている。ここで５年ということに何か特別の意味がある訳ではなく、あくまで比較のためである。

表3 野宿経験タイプ：前回との比較

	15 年調査		19 年調査	
	n	%	n	%
長期層	481	24.1	800	41.8
再流入層	267	13.4	346	18.1
新規参入層	1247	62.5	769	40.2
計	1995	100.0	1915	100.0
欠損	19		39	
合計	2014		1954	

注：長期層　（今回の野宿≧5 年）
　　再流入層　（今回の野宿＜5 年、初めての野宿≧5 年）
　　新規参入層（今回の野宿＜5 年、初めての野宿＜5 年）

これを見ると、前回調査では新規参入層が 62.5%で、長期層は 24.1%と少なかったことがわかる。これは時期的にホームレスが拡大していった時期であったことから当然と言えよう。これに対して、今回調査では新規参入層の割合が大幅に減り、長期層の割合が増えていることがわかる。また、長期層ほどではないものの再流入層の割合も増えている。つまり、今回調査では、前回調査に比べ従前から野宿をしている者及び野宿経験を持って路上と屋根のある場所を行き来している者が中心になっていると言える。

さらに、野宿形態について前回調査から今回調査への変化をみたものが表４である。こ

れを見ると、前回調査と引き続き「ずっと路上」が大多数を占め、「時々、ドヤ・飯場等」の労働と関連する場所等との行き来がある層の割合が減少し、一方で、「病院・施設・センター等」の制度と関連する場所との行き来がある層の割合が増加している。

野宿経験タイプ別に野宿形態の変化（図９）を見ると、長期層では、「ずっと路上」の割合が 56%から 73%に増加し、一方で、「時々、ドヤ・飯場等」の割合が減少している。再流入層では、「ずっと路上」の割合が約５割と変化はないが、「時々、ドヤ・飯場等」の割合が減少し、一方で、「病院・施設・センター等」の割合が増加している。新規参入層については、前回調査とほとんど変化はなかった。

「時々、ドヤ・飯場等」の労働と関連する場所等との行き来がある層の割合が減って、「病院・施設・センター等」の制度と関連する場所との行き来がある層の割合が増えているのは、ホームレス対策が拡大し、自立支援センター等の利用が増えたことや、高齢化とも関連して病院利用が増えたことなどが考えられるが、この点はまた後で検討したい。

表4　今回の野宿形態　:前回との比較

	15 年調査		19 年調査	
	n	%	n	%
ずっと路上	1279	64.1	1344	69.5
時々、ドヤ・飯場等	446	22.4	281	14.5
病院・施設・センター等	185	9.3	269	13.9
その他	84	4.2	41	2.1
計	1994	100.0	1935	100.0
欠損	20		19	
合計	2014		1954	

